コロッセオ

西嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コロッセオ

【Ｎコード】
Ｎ８５８８Ｃ

【作者名】
西嵐

【あらすじ】
ある日の突然の夢、そこから全てが狂い始める。俺（篠崎かける）が、崩れていく「常識」の中で成長していく物語。

第一話　発端　夢（前書き）

シビアかつ想像上の世界を描いた小説です。

第一話　発端　夢

毎日が平凡すぎてつい、見逃してしまうことがある・・・
何だって？そんなこと俺の口から言えるワケがないだろ！
・・・・え？どうしてもって？
しかたないなぁ・・・特別だぞ？
この世界には、今はまだ二つしか見つかってないけど、”秘密”がある。
そもそも、だ。今君が脳裏に自然と描き、焼き付けられている「常識」とは何だ？
まぁ、急に聞かれても困るっていうのは大体予想してたけどね。
本題に入ろう。
それら「常識」の全てが”秘密”によって覆されてしまうんだ。
・・・質問は今度受け付けるよ。
ではまた会おう。

寝る前に夜風にあたっていたためか、窓が半分あいていた。
突然現れた黒い声、意味不明な単語を並べて消えていった。・・・
夢だったのか・・・？
”秘密”・・・
”また会おう”・・・

「まぁ、ただの夢だったな！」その言葉の半分は嘘だった。
自分で「夢だった」と決め付けておいて何故か納得できていない。
急に気が付いたように、時計を凝視する。
・・・十二時三十分・・・　　！！！？
「十二時半！？なバカな！！？・・・俺が寝たの、十二時丁度だぞ

？」
しばらく、信じることもできずに立ちすくんでいた。
たった三十分のうちに凄く長い夢を見ていた。
しかも、はっきりと覚えている。あの声。あの雰囲気。
紛れも無い。俺は「見た」のではなく「体験」したのだ。
・・・だとしたら、”秘密”ってなんだろう？
考えようにも、睡眠時間三十分では脳も働かず、ただ寝ろとサインを送るので沈むように眠りに就いた

第二話　痛みと・・・

複雑な朝を迎えた。うわのそらってこんな感じのことを言うんだ・・・

どうせ、帰宅部だし、趣味も無い。だったらちょっと調べてみたっていい気がする。

友達・・・いるけど、こんな話したら距離をおかれるに決まってる。

自分一人で・・・はじめて味わう「一人ぼっち」なんだか新鮮だ。

「よし！気合入れて調べるぞ！！」現実である保証は無い。むしろただの夢である確立の方が高い。

でも、やっと一つ興味が溢れてきた。

それだけで動機は十分だった。アテは無い。でもそれはそれで一興。

そう言い聞かせて一歩目を踏み出した。かっこよく・・・のはずが見事に階段を踏み外し、転がっていった。

よく、漫画でこういうシーンがあると大概「イテテテテ」程度だが、実際そのレベルで済むはずもなく、声も出せないほどの激痛だった。

しばらく強く目をつむっていたけど、だんだん痛みが和らぐにつれ、落ち着いてきた。

ふっ、と視界に影が出てきたから見上げると、そこには「この人どうしたの？」的な目で見つめてくる一人の同年代の女の子がいた。

「・・・何かついてます？」俺は少し緊張しながらよくある一言を言った。

「いえ、ちょっと気になったことがありましたから」彼女は何故か敬語で言った。

「気になったこと？・・・何？」

「さっきあなたはこの階段を落ちて下まで降りてきたのですか？」
何を言っているのか分からなかった。

「なんのことですか？」

「いや、あの、あなたは向こうから何かに押されたように飛んでこっちに落ちましたよね？」

「はい？」

「階段を全て飛び越えるような距離を助走もジャンプも無しで飛んだのを見ましたよ？」

「え！？」
俺は階段を転び落ちたのではなく、５０段近くある階段を飛び越えて地面に直撃した。と、彼女は言いたいらしい。
でも、常識でそんなこと・・・
常識・・・「常識」・・・！！！
あの夢で言ってた通り、「常識」は覆された・・・？
・・・いや、何かの間違いだろう。
体中に角でぶつけたような痛みが残っていた。・・・たしかに角にぶつかっているんだ。
飛んでなんかいない。飛んでなんかいないんだ！
自分に言い聞かせる度にますます「夢」が現実のものとなっているように感じて怖くなった。

第三話　『夢の連鎖』

しばらく立ちすくんでいた所為か、歩き出そうにも、上手くあしを動かせない。
完全に、目の力が抜け、細胞の全てが眠りにつくかのような、そんな気がした。

「どうかされましたか？」俺の顔を覗き込むように彼女は言った。

「・・い・・・え」滑舌とかの問題ではなかった。声を出す気力がないのだ。
夢でみた”秘密”の一つを知った・・・いや体験したのかもしれない、そんな言葉が渦巻いていた。
・・・まてよ？今日は何曜日だ？・・・水曜日・・・学校がある日じゃないか！
どういうことだ！？確かに朝起きて、そこから・・・階段を・・・飛ん・・で・・・？
朝学校へ向かってここまで来たのではないのか？
でも、学校はてんで反対方向じゃないか。しかも今の俺はリュックも持っていない。
・・・ちょっと待て！！

「君は？君の名前はなんて言うんだい！？」俺は話の流れに合っていない質問を投げ掛けた。

「私ぃ・・・私はねぇ、フフフ」口調がさっきと全然違う。

「『夢の中の夢』・・・夢の連鎖。とでも言っておきましょうか」

何を言っているんだ！と言おうとしたところで、俺の目は信じられない光景を捉える。

――

朝日が丁度、夜開けたままの窓から差し込む。

急に声を張り上げたからなのか、クラクラしている。
よく分からない状況下で知らない女の子と会話をしていた。
・・・はずだった。・・・のに。
今、俺は自室のベッドに座っていた。
何時に起きて、座っていたかを覚えていない。
ただ、「『夢の中の夢』・・・夢の連鎖。」これだけが頭を縛っていた。

第四話　翌日

俺の声が、聞こえるか？
聞こえていても別に返事はいらんよ。
『夢の中の夢』・・・か上手く言ったもんだな、『夢の連鎖』。とも言ってたな。

まぁ、どっちにしろお前に全てが把握できるわけが無いんだ。
無理をするんじゃあない。
崩れていくんだよ。
ここで会えたのも一興。お前が動いたのもまた一興。

でも、一線は超えるな。こっちに来てはいけないんだ。知ろうとするな。
分かったら、今はただ深く、眠れ。

「また・・・」
俺は確か学校をサボって寝てたんだっけ・・・。
枕もとにある一冊のマンガ雑誌。寝る前に気分を紛らわそうと読んだのを覚えている。が、内容は覚えていない。

「チッ！」
舌打ちはしてはいけない。そう小さいころ母の習った。今はそんな小言をいったりする母はいない。

いるのは、反抗期に入った息子を受け入れられていない、息子から見たら狂った母だ。

「・・・くそ、またあいつか。いい加減出てくんなよな。」
『一線は超えるな』って・・・そんな言い方すっから『線』を探すんだろうが！
イライラしていた。思いっきり床に転がっているクッションを蹴飛ばす。ついでに壁を殴る。
バンッ！殴った音が響いた。

「あっ、これ母さんに聞こえたかな？」
怒られる・・・一瞬そう思ったがすぐに撤回した。
反抗期の息子の言葉遣いに傷つくのを恐れて、最近では『おかえり』と『ご飯だよ』と『お風呂空いたわよ』くらいしか言わなくなった。
早すぎる昼寝をしたためか、眠気は全く無く、スッキリするどころか逆に逃げ道が無くなったようで、苛つく。

夢によって繋がれる理解不能な現実、それが俺の心を縛る。
前だけを見据えていても、つい横目に入ってくる、興味をそそるそれら全てにたぶん意味は無く、
体に残る、アザと痛みと、そしてあの言葉・・・あいつ。
夢によって起こる連鎖があると言うなら、この世界はまるで『夢』そのものじゃないか・・・

『夢』そのもの・・・そうだ！たぶん全部悪い夢に過ぎないんだ！
深く考えるな、そう一人言で繰り返しても、自分の奥底にしまった扉を叩く音はそれを否定した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8588c/

コロッセオ

2010年10月11日00時00分発行